

折札蘆

林美美子

折 札 蘆

林 芙 美 子



新 潮 社 版

昭和二十六年七月十四日 印刷
昭和二十六年七月十八日 發行

定價 貳百圓
地方
賣價 貳百拾圓

著 者 林 芙 美 子

發 行 者 東 京 都 新 宿 區 矢 來 町 七 十 一 番 地
佐 藤 義 夫

發 行 所 東 京 都 新 宿 區 矢 來 町 七 十 一 番 地
株 式 會 社 新 潮 社

電 話 九 段 (33) 二 一 一 二 五
振 替 東 京 八 〇 八 番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

東日本印刷株式會社

目次

林
芙
美
子
自
選



折れ 蘆 7

冬 の 海 29

大 阪 城 45

自 動 車 の 客 55

浮 洲 83

金 絲 雀

.....
· 105

天 草 灘

.....
129

童 話

.....
141

あ ぢ さ ゐ

.....
155

瀑 布

.....
183

裝
幀

岡
村
夫
二

折

れ

蘆

折

れ

蘆

豊岡慶子が、志賀高原の地獄谷で、自殺をした事に就いては、慶子を知つてゐる誰もが、不思議な気持ちにとらはれてゐた。割合豊かな裁判官の家にそだち、家族も、父だけを早く亡くしてゐたが、母も、妹も弟も、慶子に對しては、一種の敬慕の気持ちを持つてゐるこそすれ、誰も慶子に辛く當るものはなかつた。慶子の友人達も、慶子を無口な、眞面目な女性として信頼してゐた。

慶子が自殺したのは、二十四年の秋であつた。誰も、その死因に就いては知るものがない。その當時の新聞には、只、小さく、オールドミスの死としてかたづけられてゐた程度で、彼女の自殺は、哲學的な神聖な死のやうに思はれ、友人間では、それが少しづつ傳説になりかゝつてゐた。生前、小説のやうなものを、二つ三つ書いてゐた様子だつたが、その小説も、ひどく幻想的なもので、古代の女性を理想化したやうな、面白くもない作品であつた。本當の年は四十歳であつたが、一度も結婚した事がないので、三十四五歳にしか見えない。

慶子の妹に、京城の天文臺に勤めを持つた男に嫁つてゐた、悠子といふのがゐた。終戦と同時に夫婦で引揚げて來て、慶子達と一緒に暮してゐたが、この悠子が、今年の秋の大掃除の日に、姉の部屋の下から、一冊の大學ノートを見つけて、始めて、慶子の死因を知り、その大學ノートはまた、元の場所に置かれた。

その大學ノートには、このやうな事が書いてあつた。

——私は、女子大の英文科一年の時に、寮にはいる事が希望で、その頃、浦和の裁判所に父が勤めてゐたので、一家は、浦和に住んでゐた。私の通學は、浦和からは可能であつたが、母を説いて、寮へはいつた。

私は、女學校の時もさうであつたが、不思議に、同性に愛される、一種の雰圍氣を持つてゐたやうである。寮へはいつても、私に熱烈な友情をひきしてくれる友人が二人ばかり出来た。私は幸福であつた。二年の時に、一人の友人が、私に、カントの純粹理性批判といふ本を貸してくれた。そのなかに、我々のあらゆる認識は、經驗とともに始まるといふ事は、何の疑も存しない。何となれば、認識能力は、對象によらずして、何によつてそのはたらきを始めるやうに喚び覺されうるであらうか、

對象は、我々の官能を觸發して、一方に於ては、自ら表象をつくり、他方に於ては、我々の悟性活動をはたらかして、表象を比較し、連結し、或は分離せしめ、さうして、素材なる感性的印象を改造して、對象の認識すなはち經驗たらしむるものである。といふ一文があつた。私は、その頃的能力では、このカントを吸収する力はなかつたが、この言葉だけは、生涯、私の胸のなからぬぐひざる事が出事なかつた。學校を卒業して、田園調布の或る市立女學校の英語の教師になり、五年ほど勤めた。その學校でも、私は割合女生徒に愛されて幸福であつた。私は、少しづつ自分と云ふものが、自分をとりまく同性間に、女ではない感情を植ゑつけてゐるのではないかと思ひ始めて來た。私は化粧をした事もなかつたし、髪も短く刈つてゐたし、近視だつたので、黒ぶちの太いロイド眼鏡をかけてゐた。この扮装だけで、私は、同性から慕はれてゐるといふ事もちゃんと知つてゐた。實際、私を見

る同性の眼が、何とも云へない、光りをもつて、私に反射作用をもたらせてゐる。私の胸のなかでは、この演技をよく承知するやうになつた。私は、つとめて、女らしいといふ感情から遠ざかるやうにした。——五年の生徒を連れて、京都へ秋の修學旅行に行つた時も、私の化粧艷のなかは、齒ブラ・シと手拭だけあればいゝといつた、簡單なもので、石鹼も、齒みがきも、可愛がつてゐる生徒のものを使つてやつた。どの生徒も、みんな、私にそのやうなものを、使つて貰ふ事を希望してゐたから。私は、さうした生徒を可愛らしいものとは思つてゐたが、一人として好きではなかつた。私は、かうした生徒の心の祕密を手傳つてやればいゝだけのものだと思つてゐた。女生徒達に共通の甘い祕密を、私が主役になつて受持つてゐるといふのは、學業を教へるよりも面白かつた。誰もゐないところ、一寸、手を握りしめてやるだけで、その生徒は、馬鹿に英語がうまくなつて來た。また或る生徒には、柔く髪をなでてやる。風邪をひいて、くしやみをしてゐる生徒には、私は、大判の麻のハンカチををしげもなく貸してやる。ハンカチを持つて歸つた生徒は、二三日うちに、イニシャルのついた、そのハンカチよりも、上等なものをプレゼントしてくれた。かうした、日々のいやらしさが、私を味氣なくしてゐたが、私の日常には、かうした經驗を積み重ねてゆくより他に、何の仕事もない暮しであつた。云はば羊飼ひのやうな役目で、時々、自分の人生をつまらなく思ふ時があつた。父は、私が女子大を卒業した年の春亡くなり、その頃、一家は、現在の池上の家を買つて住むやうになつてゐた。三つ違ひの妹には、色々と結婚の話も持ちこまれてゐたが、私には、そのやうな話は一つもなかつた。別に宣言したわけではなかつたが、私は誰の目にも男ぎらひのやうに思ひ込まれた様子である。私も、結婚を考へないわけではなかつたが、私の口からそんな事を云ひ出すには、喜劇としか思

へない程、私はひどく男性化した女になつてしまつた。派手な着物や洋服を、妹は貰つて貰つたが、私は、何時も、父の古いものをスーツに仕立なほして着込んでゐた。私が、生理的な病氣で浮かぬ顔をしてゐると、家族のものは、まるで神祕だと云はぬばかりの笑ひ顔で冷かしたりする。私は、ますますさうした氣持ちに反駁したくなつてゐた。氣兼ねは私の心のうちに巢食ふばかりで、表面は、けつべきをよそはひ、私は、さうした演技に、自分自身溺れる事に馴らされてきた。

京都の宿で、蒲團が足りなくて、私はどの生徒かと寝なければならなくなり、生徒にくじを引かせた。山田俊子といふ小柄な生徒にくじがあつた。私は、その生徒を本當は好きではなかつた。藪鴉みの可愛い生徒だつたが、何としても好きにはなれない。あまりに女らしくて、乳房などは、お椀のやうに大きく、腰の厚いのも、私にはいやらしく見えた。九時の消燈であつた。ひとさわぎ濟んだあとの疲れで、あつちこちで、やつと寝しづまり始めた頃、廊下の淡い灯が、襖の隙間から、部屋の中に射し込んでゐて、私の眼は妙にさえて來た。疲れてゐるくせに、寝つかれなかつた。時々生あくびを噛み殺してゐると、蒲團の間から、甘い香水の匂ひがした。俊子が用ゐてゐる匂ひなのであらう。急にむかつて來て、私が大きいのびをしようと、俊子はむつくり腹這ひになつて、枕元を手さぐり始め、ハンカチをといてゐたやうであつたが、紙の音をさせて、廳で、ばつとマッチを擦つた。驚いて俊子を見ると、俊子は煙草をすうつと深く吸ひ込んでゐる。二三度、煙草の火が明滅したかと思ふと「先生、吸はない？」と云つて、その煙草を、私の唇のなかに押し込んでくれた。私は、その頃時、煙草を吸つてゐた。美味いとも思はなかつたが、一つの私の演技に役立てる爲の喫煙であつた。仕方なく、闇のなかで、私は黙つて煙草を吸つた。「先生、灰皿、こゝよ」俊子は灰皿のありかを私

に教へて、如何にも情夫に寄り添ふやうなしぐさで、私の肩に、彼女の小さい頸を置いた。四圍の寢床に、この様子をみつめてゐる光つたいくつかの眼を意識して、私は吸ひたくもない煙草を吸つてゐた。かうした場合、いつたい、男は、どうするものなのだらうかと、ふつと私は考へた。男の氣持ちになつてみようと思つたが、女の私の意識が邪魔をして、私は、黙々と煙草の火の明滅するのを見てゐるきりである。私はどうしても男の意識にはなれなかつた。むしろ、俊子の將來の場面を描いて、嫉妬を感じた。香水の匂ひはむせるやうである。私は、數學を擔任してゐる坂口良士の面影を描いてゐた。現實は數奇なものである。私は隣りに寢てゐる俊子に、敵意を感じてゐた。この旅行には、校長の相澤せい子女史と、國文の比嘉鈴子と、私とで引率して來たのだが、この兩女史は、もはや五十歳になる老女教師で、生徒達には敬遠されてゐた。老女史二人は主人持ちでもあつた。別室を取つて二人だけで寢てゐる筈である。

老女史は、女としての魅力はとづくに色あせてゐた。だが、校長の相澤女史は、髪を黒々と染めて、珍しいイギリス卷きに結つてゐた。古風な厚化粧でもあるのが、時々、光線の工合で、若々しく見える時があつた。夏の朝の太陽のさん／＼と直射するところでは、五十歳の年輪が、むごたらしく醜くかつたし、大きな汚點が顔の皮膚にはつきり浮び出てゐた。髪の毛は薄くなり、頭髮のなかは、茶色に光つて見えるところもあつた。老醜以外の何ものでもない。ふちなし眼鏡位では、その眼もとのたるみをかくすわけにはゆかなかつた、相澤女史の良人は、女史よりも、七ツ八ツ若いひとだといふ風評である。——若い私が、まだ獨身で、一度もそれらしい問題も起きないといふのは、自分でも不思議であつた。家に來る男の客も、妹の悠子を話題にはするが、自分に對しては、一度もさう

した事は云つてはくれなかつた。女を美しくする作用は、一夜の熟睡と、一夜の男であると、何かで讀んだが、私には、さうした経験はそれまでは一度もなかつた。

朝、俊子は、私の胸の上に手を巻きつけて眠つてゐた。學校へ戻つてからも、俊子が私に心かたむけるしぐさは、いぢらしい程であつた。私は益々彼女が厭であつたが、私はさうした表情は少しも顔に出さなかつた。私の家は、私を愛してくれる生徒達で賑つた。だが、その生徒達の訪問を、私は少しもよろこんではゐなかつたのだ。弟の浩太郎は帝大の法科の學生だつたが、私を慕つて来る生徒のなかには、何時の間にか、弟の方へ愛情を見せるのもあるやうになつてゐた。俊子もその一人である。私が學校をやめて、二年位してからであらうか、弟は、この山田俊子とひそかに戀を語るやうになつてゐた。私は胸が少し悪かつたので、父の知人の紹介で鐵道病院へ三ヶ月ほど入院したが、私は、こゝでも、中村雪子といふ看護婦の愛情を浴びるやうになつた。妹の悠子が結婚して、二年目に日華事變が始つた。妹の主人は三鷹の天文臺に勤めてゐた。下連雀に新居を持つた。私は、退院して、また何處かの學校に奉職するつもりであつたが、さうした勤めも、病後のせゐか飽きが來てゐた。母は、私が一生涯獨身で暮すと思ひこんでゐるせゐか、悠子の嫁入支度以上のものを、父の郷里の水戸の山林を分ける事でつぐなつてくれた。私はそれを弟に相談して、戰爭の好景氣に乗じて金に變へる方がよいと、その山林を賣り拂つた。私はその山林で、二萬圓ばかりの金を得た。二萬圓の金を自分のものにする、私は、女子大時代の仲のよかつた友人を頼つて、アメリカのシカゴに行きかけた。友人は結婚して、シカゴで花屋を始めてゐた。友人は良人を持つてから、私には何時とはなしに疎遠になつたけれども、一年に一度は、シカゴ生活のたよりをくれてゐた。子供が三人出來て、

その寫眞も送つて來た。——結婚とは、私にとつては何とも不思議な感情であつた。そして、子供が出来るといふ事も私には神祕であつた。私は、男女間の或る一定の輪郭だけは判つてゐたが、深くは知る事が出来なかつた。非常に興味を持つてはゐたが、さうした事を考へるのは、私の精神をくたくたに疲れさせた。たつた一人の男性である弟の肉體から、私は、さまざまな事を考へさせられたが、弟とすれ違ふ時の、草臭い匂ひが、私には異臭に思へた。俊子は時々遊びに來てゐたが、私に向ふ時の眼は、もう以前のやうな光つた眼差しではない。學校時代とは生れ變つたやうに美しくなり、むきたての玉葱のやうに、肉體のすべてが、すべてとしてゐる感じだつた。看護婦の中村雪子は、日本赤十字の試験を受けて、間もなく野戦へ出征して行つた。私のアメリカ行は、つひに沙汰やみになり、私は、なす事もなく、ぶらぶらと家にゐたが、太平洋戦争の始る一寸前に、弟は、知人の娘と見合ひをして、その娘と無難作に結婚式を擧げてしまつた。俊子との間が、どのやうだつたのかは、私は聞いても見なかつたが、俊子は、全部の手紙と寫眞を弟へ送り返して來た。弟も、俊子の手紙や記念寫眞を送り返してゐた。俊子には、弟の他にも戀人があつたのだと、弟は俊子の浮氣を怒つてゐた。弟の細君は米子と云つた。軍人の娘で、父は海軍主計大尉であつたので、いろんな珍しいものを、軍から貰つて來てゐた。もうかなり物資が乏しくなつてゐたので、軍人の娘を貰つた事は、弟にとつては幸福であつた。弟は三菱へ勤めてゐたが、結婚して間もなく、神戸支店へ轉勤になつた。私は母と二人だけで暮すやうになつたが、女の軀といふものは、精神作用がかなりひどくものだと判るやうになつた。私の乳房は少女のやうに固く、小さくて、腰部の發育が女のやうではなかつた。母だけしかゐない自由さで、私は、二階の寢室で、時々、米子の残して行つた鏡臺に向ひ、眼鏡を取つて